

天台止観における色法について

塩 入 法 道

色法に関しては、五位の一つである色法、五陰の一つである色陰、六境の一つである色境等の意味があるが、ここでは色、形質をとめない示現するものがあり方一般という程度に理解しておく。そして主として『摩訶止観』において論じられているところの陰入界、特にその中の色的様相に焦点をあて、天台止観の基本的立場を考察してみたい。

まず、『摩訶止観』で五陰をはじめとする陰入界がどのように把握されているか概観しておく。第七正修止観の章において、十境の第一として陰入界境が挙げられており、これが第一に置かれる理由は「一現前。二依³經。」常自現前。若³堯不³堯恒得³為³觀。」からであると述べられている。そして「今当³去³丈就³尺去³尺就³寸、置³色等四陰³但觀³識陰³。識陰者心是也。」として陰入界のうちでも五陰、五陰のうちでも識陰を取り挙げてまず観境とすべきであると論じている。しかし識陰のみを他から切り離して取り出すことには疑問が残る。十境の第一があくまで「陰入界境」と名付けられてお

り、現前しているのは陰入界であると明示されているからである。また、十二入十八界は元來五陰とは別の系列であり、五陰と分離させることは可能にしても、五陰そのものは一体のものであり、色等の四陰を置いてただ識陰のみを観察するということは不可能であると思える。『摩訶止観』の他の箇所には、

「論云。一切世間中但有³名³与³色。若欲³如³実觀、但當³觀³名³色。」
(傍線筆者、以下同)

「声聞人依³四念処³行³道。菩薩初觀³色乃至³一切種智。」
「受身之始無³不³有³身。諸經說³觀多從³色起。故以³陰為³初³耳。」

などの文章が見られ、五陰をより総括的に色心(名)の二法に取りまとめ、あるいは色といふ心といふこととはきて、先の表現のように、五陰全体を識陰のみに集約させることには無理がある。思うに「丈を去って尺に就く」という説明は、五陰中の識陰に限ってそれを取り挙げて観察の対

象とするということよりも、心すなわち自己心を主体的にま
ず觀察せよという表明だと見るべきだろう。自己心というこ
と、さらに現前ということ強調するためにここであえて識
陰を提示したと思われるのである。このように考えれば、陰
入界とは、自己心あるいは一念心に現前しているかぎりでの
陰入界であり、陰入界のあり様がそのまま心のあり様と等し
いものであると見ることができだろう。

それではその現前の様相はどのようなものであろうか。こ
の点に関して注目したいのは『摩訶止観』において、陰入界
のうちでも特に色的様相つまり色、形質をもったものとして
自己心に映るあり方、これが常に暗示されて述べられている
ことである。華嚴経の「心如工画師画種種五陰。」という
譬喩はたびたび引用されるものであり、また、

「正法念云。如画師手画出五彩。黒青赤黄白。白。」

「大品云。色淨故受想行識淨。般若亦淨。法華云。顔色鮮白六根
清淨。」

といった引用が多く見え、その他鏡像や水鏡の譬喩は常に用
いられるものである。これらはいずれも現前の陰入界のあり
様を喩えているものであるが、ここには色や形をもった何も
のか、つまり色的様相が強く意識されていると思われる。

このことは止観の実際の行法である四種三昧が説かれてい
る場面により具体的に見えている。常行三昧において、

「能如是觀者。是觀如来十号。(中略) 見仏相好一如照水鏡
自見其形。初見一仏、次見十方仏。」

とあり、常坐三昧の箇所では、

「如夢見七宝親屬欲樂、覺已追念不知何処。如是念仏。

(中略) 如下人以宝倚瑠璃上影現其中。亦如此丘觀骨骨起
種種光。此無持來者。亦無有是骨。是意作耳。如下鏡中像不

外来不中生、以鏡淨故自見其形。行人色清淨所有者清淨。

欲見一仏即見一仏。」

などと述べられている。これらは仏の相好を念ずる時、これ
が顕現する様相を述べており、色的あり方に重点が置かれて
いる。もちろんここでの顕現は、我々が日常的に外界の物質
を眼でとらえ認識するということは次元の異なったものでは
ある。『摩訶止観』によく引用される大智度論の言葉を借りれ
ば「皆如炎幻響化」として現われるものであることは注意
しなければならぬ。しかしこの炎の如く幻の如くという表
現が、単に一切が空であり不可得であることの喩えとして用
いられているわけでもないことは確かである。自己心に現前
する陰入界は何らかの固定的実体性をもったものでないこと
は当然ではあるが、全くの無ではなく文字通り炎の如く幻の
如く、すなわち色的様相をもってそこに現われるのである。

陰入境界において観不思議が説かれるにあたり、自己の一
念心中に主体的に把握された五陰が五陰世間、衆生世間、國

